

源流大岩魚～六人で作り上げた釣行記～



[報告者]：藤田篤

[釣行日]：2024年8月23日～25日

[参加者]：内野繁樹、平江誠、五百川和也

福田卓也、大貫和之、藤田篤

【冒険の始まり】

この釣行に参加表明してからワクワクがとまらなかった。

今回行く川は比較的有名であり、釣人なら一度は聞いたことあるのではないだろうか。

そして、今回はその源流部、選ばれた者しか寄せ付けない秘境であり過酷な冒険に違いない。

目指すは”源流大岩魚”この川の全貌を魅せてもらおう。

【出会う六人】

この日仕事が終わって準備物の最終確認、つい多くなってしまう道具達、軽量化のためにも選りすぐりの道具を選抜し積荷。

忘れ物はないはず、向かう車内ではザックの中身を何度も頭で埋めていた。

深夜を回り集合場所である駐車場に到着。外灯などない暗く広い空間が広がるなかぼつりと持参したであろうランプを照らし、なにやら談笑しているグループがいる。

一目瞭然、今回釣行でお世話になる仲間だ。私以外全員揃っており前夜祭を楽しんでいた。

今回のメンバーは私、藤田含め六人体制。平江さん五百川さんとは面識があり何度かお世話になっていた。大貫さん福田さんそして今回リーダーを務める内野さんとは初対面、釣行記を見ているとよく目にする同じ匂いがする、いや、それ以上の熱い方々なのは伝わっていた。

不思議と緊張感は無く軽い挨拶をすませ前夜祭に参加。

同じ溪を歩む同志、会話が弾む。温かく迎え入れてくれて会話するほど満たされていくものが確かに感じ取れた。

そう話しているうちに明日から始まる釣行の話になる、今回の予定は2泊3日とし

1日目:登山道を登り稜線へ、鞍部から谷へ続く沢筋をひたすら下降し本流出会いを目指す。

2日目:テン場を上げるため、釣りをしながら遡行。

3日目:枝沢から源頭を詰め稜線に立ち下山する。

なかなか厳しい釣行となりそうだが、明日の釣行に胸を躍らせながら就寝とした。

【一日目の朝】

源流部へのアプローチ方法はさまざまだ。

下流からひたすら上がっていくのもよし、登山道・ゼンマイ道を利用するのもよし

整備された道路を自転車で利用するのもよし、ボートを漕いでいくのもよし。

今回の釣行ではゴンドラリフトを利用し高度を稼ぎアプローチをする。

出発の挨拶を済ませ往復チケットを購入、4人乗りのゴンドラへ2人ずつ乗車していく

片道1,400メートルを僅か7分足らずで跨ぐ。

私は福田さんと相乗り、福田さんは里川で溪流釣りをしていたが源流を見たいとの理由で参加したそうだ。つまり今回が初の2泊3日源流釣行であるが不安など感じさせなかった。趣味であるトレイルランニングで鍛えた体力と積極的に会の釣行にも参加しており思う存分源流を肌で感じて欲しいと願った。

爽快な景色を堪能しつつゴンドラ山頂駅に着く、山頂駅周辺はよく整備されており広大な土地に数百種類の高山植物が自生しているとのこと。

ここから登山口に取り付くのだが、これが結構きつい。

周りは色とりどりの高山植物が我々の出発を歓迎してくれているようだが

朝から傾斜があるこの坂は体に悲鳴をあげさせた。



天気が良く登山日和。



涼しげな感じだが結構きつい。

【登山道に生える珊瑚】

本腰を入れて山に取り付く、整備された登山道は快適であるが時より出てくるぬかるみを避けるようにジャンプしおぼつきながら進んだ。

傾斜が出てくると流石に息が切れてくる、片足ずつ全体重を乗せ段々を越えていく。

歩き始めて数時間、登山道脇に一際異彩を放つものが現れる。

それは自然界ではあまりにも目立ち、手をすくい上げるように”見つけて”と言わんばかりに主張する、白く輝く珊瑚のようなキノコであった。

勿論、我々6人はまんまと引き寄せられる。

こんな手の届きやすい登山道に生えており、見向きされるだけのキノコなど“毒注意”と言っているようなものだと、そう決めつけていた。

だが平江さん「これはハナビラタケと言って食べられる」と美味しい食べ方まで教えてくれた。

知識と経験を研いてきたであろう川だけではない山のスペシャリストだと改めて強く実感した。

キノコトーク混じり小休憩を挟んだ後、五百川さんが今晚のおかずにと一掴みいただく。根こそぎ収穫せず、他の登山者へ分け与える清心にととても痺れた。



高さ 20 センチ、幅 30 センチほどのハナビラタケ。

【ササ・ラビリンス（下）】

稜線を歩いて数時間、下降予定の鞍部に近づくとつれ笹藪に覆われていく。
地形図を確認しながら歩いている内野さんが藪の薄そうなところを見定める。

先頭は内野さん、次に平江さん、五百川さん、私、福田さん、大貫さんの順で切り込んでいく。

言わずと知れず先頭の内野さんが一番きつい、大人の背丈以上、360度視界を奪われた状態の斜面へ潜りこみ、獣道もない密集した藪を下降していくのだ。

さらに言えば、笹は踏んでも折れずしなってくる。

そのため勢いよく跳ね返り掻きわけても掻きわけても反発し自立を保とうとした。

私はとにかく五百川さんに付いていこうと必死だった、数メートルでも離れれば見失い先頭の3人が掻きわけてついたクセにあやかれないからだ。

なんとか全員無事笹藪を抜けるとドンピシャで本流に続く沢筋が現れた。

先頭をきって藪に飲み込まれていく内野さんの後ろ姿は勇ましく、少し面白くもあった。



藪漕ぎを終え休憩中。

【水を得た魚のように】

沢筋を見つければ、あとは水線通りに進むだけ。

草付きの斜面や泥、岩、湿った倒木の上などはよく滑り、気を引き締め慎重かつ大胆に進んでいく。下降していくと次第に水量が増えてくる。

皆、水が恋しかったのであろう、嬉嬉と水面を踏んでいく。

いるはずのない岩魚の生存を片目で確認しながら快適に降りていった。

すると目の前に10メートルほどの滝が出てくる。

大したことの無い滝だが足場の岩がヌメリ安全をとって懸垂下降で降りることに。

先輩である平江さん大貫さんが一片の迷いもなく安全な立木にスリングを巻き付け支点を確保ロープを垂らし準備してくれた。先に平江さん、軽快に降りていき下の安全確認。

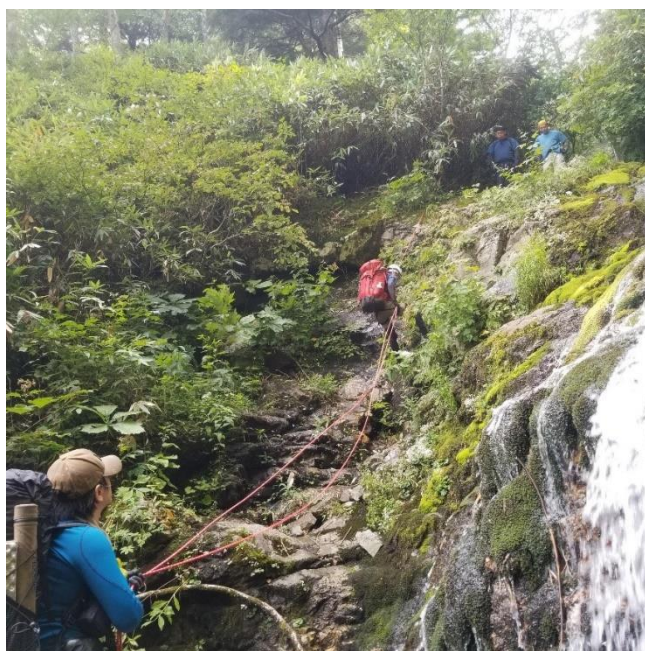
皆、慣れた手つきで足元を確認しながら安全に降りていった。

無事全員落ち口につく、なぜか平江さんが滝上に。ひゅいひゅいと滝を登っていきスリングを回収、そのまま降りてくる。我々はそんな平江さんを呆然と見ていた。

この沢最大??の難所を越え小休憩を挟みながら意外と長い沢をまだかまだかと下降していった。



ロープを持ってくれた優男。



懸垂下降中の五百川さん。

【この日一番の感動を】

ところどころ現れる小滝を草木頼りで降りていく。

左右から流れ込む枝沢により水量が増していき本流出合まで距離が短いことを知らせる。

難所と言う難所はなく良いペースで降りていく、すると前方から

「あれ出合じゃね?」、「やっとなつたあああああ」と聞こえ自然と下るペースが早くなる。

私は調べていなかったが大貫さん・内野さんが出合は見応えのあるナメ床で見てみたいと言っていた。

そしてついに、神秘的な源流部に足を踏み入れた。

「ぐはーやっとなつたあああああ！」渴いた喉が安堵と達成感で一気に潤う。

後方から福田さん、大貫さんと続き全員泥だらけでありながら清々しい笑顔で熱い握手グータッチを交わす。

「いやー綺麗だな」、「達成感すごい」、「ありがとう」、「これが源流か最高!!」

私だけじゃない、皆込み上げてくるものがあったはず。

出合はエメラルドグリーンのナメ床が続き透明感ある水がさらさらと流れている。

出合から上流を見てみるとナメ床が段々になっており釣りをするには良ポイントの連続。

会話だけでは満足できず私、大貫さん、平江さん「「ざぶーん」」クールダウン。

すると沢の中で黒い影が通った、岩魚だ！

「いるぞおおおお」大貫さんが手掴みに挑戦、そう簡単に捕まえられるはずなく沢と一体になっていた。

長かった、数十キロのザックを背負いここまでくるのは。

足腰は勿論、精神的にもくるものがある。

だが、この達成感を仲間と共有できるのが源流をやめられない理由のひとつでもあるのだ。



出会いにて、大貫さん 歓喜の素潜り。

【溪に漂う煙】

本日のテン場は出会いより数百メートル下流にあるため沢を下降する。

下流も良いポイントばかり、「あの岩の下絶対いるよね」とにやけながら下っていった。

そんな溪相を楽しみながら歩いているうちにテン場に到着。

テン場は樹木に囲まれ広く少し小高い場所にあった、一番感動したのは傾斜がないこと
岩もなければ草も生えていない、腐葉土混じりのふかふかの地面は疲労した体を癒すには申し
分のないものだ。それと同時に、この場所は先人達が大切にしてきた場所なのだと認識する。

到着したら一齐にザックを下ろし幕営の準備へ、タープを張る者、薪を集める者、誰に言わ
れるでもなく各自作業に取り掛かる。

その中でも大貫さんは雨が入り込まないようにタープを調整していく。

私と五百川さんは張ったタープに人が乗れるくらいの張力を出せる手軽で微調整可能な結び方
を教わった。

幕営、薪集めが完了し焚火の準備へ、薪を組み細い枝から火付けする。

細い枝が少なかったのか薄い煙を立て鎮火、次は少し多めに準備、平江さんの手ほどきもあり
先ほどまでとは違う濃く白い煙が上がってきた。

火は見えないが平江さんの「いい煙だ」の一言に安堵し成功したと確信した。

火の成長を心待ちにしていると釣りに行っていた大貫さんと五百川さんが帰ってきた。

平・内・藤・福「どうですか？釣れましたか？」

大・五「いるのはいるんだけど食ってくれない、スレているのかな？」

岩魚の姿は明日に持ち越しであった。



深緑に囲まれた一等地。

【1 軒目：源流居酒屋開店～源流の夜は燃えていく～】

焚火の炎が色濃くなっていく。

焚火はいい、揺れる炎を見るだけで落ち着き優しい気持ちにさせてくれる。

太い木に火が移り安定してきたら、さあ宴会の始まりだ。

一日の疲れを吹き飛ばす「「「「「かんぱーい」」」」」貸し切りの源流に響き渡る。お酒が入り小腹が空いてきたのか、愛用のナイフが炎を反射させる。

砂肝とニンニクの芽の炒め物、チーズ海苔巻き、ローストビーフ、じゃがりこを溶いて塩辛を入れたものその他アイデア料理が次々とでてくる。

どれもうまい！本当にうまい！

味付けも絶妙で万能薬味が効いた料理はすっきりとした風味で食欲を増加させた。

調理が落ち着き今日の遡行について労いの言葉を掛け合う。

あらゆる難所を乗り越えた者同士、打ち解けるのに時間は必要なかった。

すると五百川さん、登山道で採取したハナビラタケを出してきた。

湯搔いてレモン汁と醤油をかけていただく、こりこりとした触感で癖がなく山の恵みを楽しんだ。またしても五百川さん、ごそごとザックから金網を出し

「焼き鳥やってみたかったですよ」と元気がなくなった焚火場へ向かう。

消えかけの炎にまな板で伊吹を送り、職人・五百川の火入れが始まった。

金網を安定した焚き木の上に乗せ仕込んだであろう生肉を置いていく。



手拭いをおでこに巻き付け真剣な表情で串を回す姿は焼き一生、職人のようにみえた。

じっくり火を入れ、魂の一本が出来上がった。

メニューは鳥もも（間違っていたらすみません）

焚火の炎で表面が照らされ食欲をそそる。火入れ完璧、あっさりジューシーであつという間に食べ終える。

ネギ串もあったが焚火が寝たいと言っているようなので、大貫さんが食べるネギたれのようなものを作ってくれた、即席にもかかわらずうまい！米が欲しくなる。

そんなこんなで安らぎの時間を過ごし就寝につく、本番は明日、源流大岩魚を釣りに行く。

焚火焼き鳥 五百川。

【二日目の朝】

釣り人の朝は早い。

先行者の有無でその日の釣果が決まるからだ。

だがここは源流部、数時間山を歩き沢を下り苦勞してたどり着く場所、のんびりとした朝を迎える。夜中雨が降ったようだが水量に問題はない。

源流の朝食も豪華だ。

ウインナーとピーマンの炒め物、キクラゲのスクランブルエッグに味噌汁
炊いた米をかきこみ満たしていく。

”来た時よりも美しく”をモットーに片付け準備完了。

源流大岩魚を目指し遡行する。



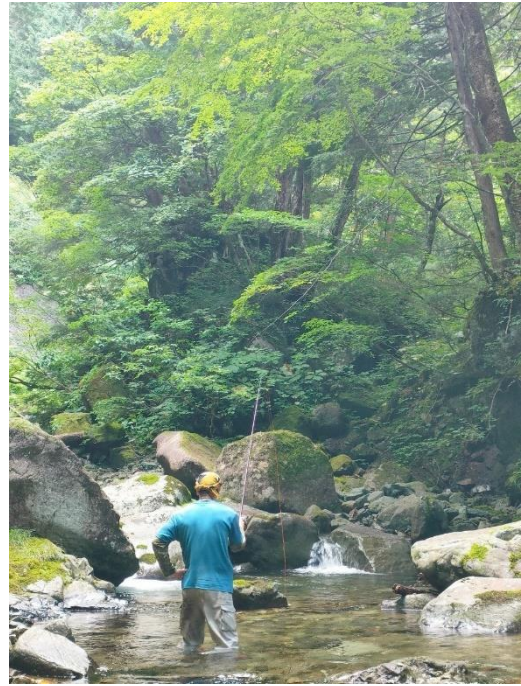
福田さんがまぜまぜ。



インスタ映えの朝食。



見惚れるライン捌き。



男は背中で語る...釣れない。



待望の一尾目は大貫さん!? (五百川さんが釣り上げたら飛びついてきた。)

【ゴーロ・ゴロゴロ】

ほどなく進むと溪相が変わってくる。

大きい岩がごろごろと積み重なり行く手を阻んでいる、ゴーロ帯だ。

1日目ならまだしも2日目となると結構きつい。

背丈以上の岩を乗り越えるため腕足を高く上げ、全身をフルに使い越えていく。

さらに遡行中落水し水分を含んで重量が増したザックを肩に食い込ませ、岩のヌメリに気を付けながら細かい溝に手足をかけていかなければならない。

次のテン場までおおよそ4キロメートル、テン場までゴーロ続かないよな...あそこから全然進んでいないぞ、自然とGPSで現在位置を確認する回数が増えていった。

この溪相を事前に調べてくれていた大貫さん「テン場まではない、そのうち終わる」とその言葉に救われる。そんな大貫さんと平江さんはゴーロが一番楽しいと言っていた。

時刻はお昼、大休憩がてら昼食とする、メニューは源流そばとウインナー。

沢と薬味そばの愛称は抜群、茹でたウインナーもパリッと弾ける。

ゴーロ帯を1キロメートルほど進み、抜けたのでは？と油断していたらお次は雷とスコール雷はゴロゴロと響き落ち、疲労した体に冷たい雨が突き刺す。

雨はどんどん強くなり沢が茶色く濁っていく。

川底の岩が見えなくなり徒渉するのも一苦勞、皆が無心で気を張りつめ進んでいった。



冷えを知らず、昼食前の素潜り。



源流に現れるという幻の“そば洗い”。



雨ざーざー。



雷ごろごろー。

【名前の由来】

雨は止み、雲の切れ目から太陽が顔をだす。

テン場まで数百メートルのところまで広めのプールが現れる。

すると内野さん「いるいるあそこ」

そこには茶色く濁った水面近くをゆうゆうと泳ぐ数尾の岩魚の姿が。

「あそこにもいる」、「でかいのいる」、「めっちゃいるじゃん」冷えた体が一気に熱くなる。餌待ちなのか、歓迎しているのか、それとも人を馬鹿にしているのかこれは竿を出すしかない！ テンカラ、餌、フライと我ら六人戦闘態勢へ。

右岸に餌組、左岸に毛バリ組が一人ずつ立ち投げていく。

正直、この言葉が一番しっくりきた...「爆・釣」。

ポイントなど関係ない何度投げてもどこに投げても食いついてくる、さらに良サイズの連続。プール上部に草木が覆いかぶさり根掛かりもしばしば、深みに入り騒ぎ立てても釣れるのだ。雨が降り活性が高まっていたこともあるだろう。

するとミミズ抜群、福田さんの竿に当たりが「でかいでかい」、「尺あんじゃね？」

福田さんは釣行最大の岩魚を釣り上げた。

透き通ったヒレに腹部は濁りのない橙色、背中にかけて薄く小さい橙色の斑点模様が広がるとても綺麗な岩魚だった。

釣ろうとすればまだまだ釣れただろう、だがテン場は目の前。

幕営の準備と疲労した体を休めるため、数匹の岩魚をネットに入れ爆釣プールを後にした。



テンカラの五百川さんとダブルキャッチ。



フライの内野さん



テンカラの平江さん



テンカラの大貫さん



餌の福田さん



餌の私

【二軒目：源流居酒屋開店～創造のスペシャリテ～】

今日のテンバは二俣出合いの藪の中にひっそりと位置した。

六人では若干狭いが秘密基地のようで少年心をくすぐる。

またこのような源流部にも管理されている形跡がいくつかみえた、改めてこの自然を大切にしたいと強く感じた。

軽く整地後タープを張り薪を集る、太い薪が少ないため、断面直径20センチほどの流木に刃渡り10センチのノコギリで切れ込みを入れ何度か大貫さんが巨石叩きつけると乾いた音が響き小さい歓声が、この作業を数回繰り返した。

太く立派な彫刻のような薪が準備でき、幕営の準備も完了、「釣りに行って来たら」と言っていたき我慢できず福田さんと私は上流へ釣りに行く。

福田さんは太い右俣、私は細い左俣へ。

ここだけの話、私は力強く太い流れの本流も良いが、か細く水量の少ない枝沢のような沢が好みで思いがけない出会いにロマンを求めている。

結果、福田さんが尺上を数尾、私は一口サイズを一尾...ロマンとはそういうものである。

日はまだ沈まない、焚火を囲んで「「「「「かんぱーい」」」」」源流居酒屋開店!!
早速、五百川さん、大貫さんが釣り上げた岩魚を慣れた手つきで捌いてくれる。

あっというまに刺し身、なめろうが出来上がった。

これがうまい、身は脂がのってほんのり甘くとても上品な味だ。

皆で感想を言い合い川の恵みに感謝する。

二日目の夜だがまだまだ品がでてくる、過酷な旅になることは皆が理解しているはず
軽量化のため食料も最小限に収めるのが一般的な考えなのだが...このバイタリティには頭が上がらない。

豚肉のソテー、パリパリ麺レタス、明太子スパゲッティ、骨付き鶏肉、オニオンリング
薬味たっぷりそうめん、和洋折衷いただいた。

本当に全部うまいアイデア料理も外れなし、溪相がスパイスになっているわけではない
お店に出てきてもおかしくない一品の数々、消費したカロリーを一気に蓄えた。

さすがに疲労した体には勝てず、明日に向け釣行最後の夜を噛みしめるように就寝とした。



福田さん自作、レインマント?!



うまいもん作るぞ!!



皆が大絶賛!!内野さん特製源流そうめん。



焚火に酔うダンディな二人。

【3日目の朝】

まだ薄暗く皆が寝静まる朝方、一人起床する。

水の流れる音と種類の分からない鳥の声だけが広がる世界、沢を這う靄は息を吸うだけで水分補給できそうな濃さ。

私は、朝の源流が好きである。

最後の朝食は、ハンバーグ、ウインナー、豚バラ炒め、みそ汁。

今日も険しい遡行になるのでスタミナをつける。

ルートは地形図を見ながら上りやすそうな枝沢から源頭を詰め登山道に立つ。

ゴンドラの最終乗車受付が15時であるため早めの出発。

お世話になったテン場に感謝し、この源流を後にした。



肉肉しいほどうまい！ さわ家 スタミナ朝食。

【ササ・ラビリンス(上)】

テン場から右俣を遡行する、次第に水量が減っていき狭い空を見ながら進んでいく。
先頭の内野さんは、水線が途切れ枝沢が現れる度に地図を確認。
等高線の間隔が比較的穏やかな所を目標に安全で正確なルートへ導いてくれる。
そして取り付き予定の枝沢に入る、後は源頭を目指し詰めるだけ。
高度が上がるたび水が枯れてくる。

後方から大貫さん「この先水が無いかもしれないここいらで水分補給したほうがいい」と呼びかける。地形図では直線数百メートルでも急登や障害物により思うように進まない、脱水症状は避けたい。

そしてあいつが現れる、笹藪だ。

1日目と同じくミチミチと生い茂り我々の行く手を阻んでくる、違うのは急登であること。
加えて、枯れて短くなった笹が目線と重なり顔面を刺してくる。
斜度45度の地に生えた藪を平江さんが匍匐前進で挑む。
それぞれが笹を引きちぎる勢いで腕の力をフルに使った。

内野さん「あと10分ぐらい」

大貫さん「言ったな！！」

五百川さん「藪トレだね〜」

皆元気そうだ。

藪の中で小休憩、今朝準備したゆで卵をいただく。

大貫さん「こんな藪だけど、掴まるものが無ければこの傾斜は上れない、藪に感謝」と言っていた。

藪の隙間から光が見える、あと少し...だけこの藪を抜けたら終わってしまう。
そんな気持ちもつかの間、前方から「ぬけたあああ、ついたあああ」と聞こえた。
終わってしまうのか...名残惜しさを感じながら最後の一笹を掻き分けた。
無事六人登山道へ立ち一人一人と固い握手を交わした。

【濡れた足跡】

登山道を歩き小休憩中、遠くの山から滝のような音が聞こえる。
その音はこちらに近付いており瞬く間に土砂降りの雨を降らせた。
だが峠は越えた、残された時間を楽しみながら穏やかな坂道を久々に横並びで歩いていく。
ここでひとつ不安がよぎる。

ゴンドラの乗車時間は余裕だ、だが全身泥だらけでずぶ濡れな我々を綺麗に整備された
ゴンドラは受け入れてくれるのだろうか？

乗車拒否されたら歩いて下山するしかないと笑い話に変えながら山頂駅に到着する。

駅にはカフェやソファがあるが座れるはずはなく乗車口へ
そんな不安も杞憂に終わり、温かく迎え入れてくれた係員さんにふやけたチケットを渡した。

ゴンドラには行きと同じく福田さんと乗車した。
釣行中は色々教えを受けていた、私にも声を掛けていただき答えられる範囲で答えた。
初源流は大変だったと思うが「最高だった」と笑顔で言っていた。
早速、次はいつ参加しようかなと年間行事計画を見ている、どっぷり源流にはまったようだ。



個人的に好きな一枚。

【六人で作り上げた釣行記】

思い出に浸りながら山麓駅に到着。

駐車場まで舗装された道が続いており、終わったんだと現実に戻された。

疲労した体には意外ときつい最後の坂道を上り車止めへ到着。

我々の2泊3日の冒険が終わった。

源流釣行は肉体的にも精神的にも緊迫した状態が続く。

だが、危険で汚れて疲れて汗くさい源流でしか得られないものがある

それは実際に自分の目で見て肌で感じて欲しい、行き方、持ち物が分からない？

私は勿論、会には山、川、食のスペシャリストであるオールスターがいるではないか。

最先端な道具マニア、低予算で知恵を絞る者、ゾクゾクする遡行話や失敗話、興味はあるけど道具がないという人には、オンラインで溪流釣り具をレンタルできるサービスだってある。

釣りだけじゃない、焚火、食、山、景色、なんだって良い。

何度でも言う”肌で感じて”欲しい、それが分かればきっともう戻れない、源流人になっていることだろう。

そんな五人がいなければ成功しなかった、六人全員で作った釣行記であった。

【あとがき】

最終日、駐車場に到着した後、リーダー内野さんを囲んで挨拶がありました。

内野さんは「みなさんのおかげで無事安全に終わることができました」と言っていた。

私なら溪が嫌いになってしまいそうな幼稚な考えも、内野さんをはじめ皆さんが

釣行計画、準備物の確認、ルートファンディングをやっていただいたおかげで

無事帰ってこられた、思い出に“できる”釣行になったと思っております。

皆さんにはいつか恩返しをさせてください、大変お世話になりました。

また協調性がなく自分ばかり楽しんでしまい申し訳ございませんでした。

ですが、自分の中では一生思い出に残る最高の釣行でした。

また機会があればよろしく申し上げます。

…あ、忘れ物しました！

終わらない夏の“源流大岩魚”。



左の集合写真撮影者、内野さん。

最もアクティブで最もパッションブルで、そして最もエキサイティングな源流師たち。